

1/6(水) まい心! 倫理号です。毎日、川天気が続きます。  
立派なものには心をも揺さぶられます。

今週の倫理 950号 本物を見れば後悔したもので 2015.11.7~11.13

孝と厚がアホ一鳥

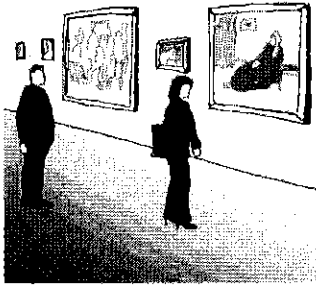
十一月のテーマ 文化と経営

# 名品に ふれる時

人上A座の一句  
かぐえん  
加藤 洲幸

丸山竹秋  
紅蓮木、求め  
愕然亭

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長の丸山竹秋（一九二二—一九九九）のことは掲載します。



え・古屋智子

**下** 手の横好きで、ときどき将棋をさす、この正月に分不相

応ながら新しい将棋駒を手に入れることができた。それは駒づくりの名人といわれる木村文俊（ふみとし）さんが、伊豆七島の御蔵島（みくらじま）のツゲ材を数年間乾燥させて刻んだ金童書体の盛上げ駒である。

輝くばかりの光沢、一様に流れている木目の文（あや）……。何かと疲れた時、落ち着かない時、思索の行き詰った時など、手にとつてじっと眺めていると、次第に心がなごんでくるのだから、まことに妙である。

つまみあげて盤に打ち下ろした時、やわらかい音が響くにもかかわらず、いくらたたきつけても、絶対にこわれないその硬さ……まさに美術品である。

いったい美術品を鑑賞するだけの眼は私にはないが、いくら素人でもよい作品に接すると心にふれるものを覚えるのは当然だ。「吹けば飛ぶような将棋の駒」でも、一心不乱に彫りこんだ真心は、ピンピンと伝わってくる。機械で大量生産した駒と比べて、そこには大変な違いがある。

絵画、彫刻、陶器、磁器、その他、みんな同じことだと思ふ。込められた一心は、自ずからその作品にしみ、また輝く。それを眺めたり、触れたり、また聞いたたりしているうちに、それらの作者の心のままに、こちらの心が律動（リズム）を奏でてくる。一口にいえば「よい気持ちになつてくる」、それでよいのだと思ふのである。

人によつて鑑賞の度合いの浅さ深さとか、批評の基準のちがひというもの、いろいろとある。しかし世に永く名作とか名品とか評価されてきたものは、一般にそれらに接することによつて、私たちの心が、いかに高まり、また美しくなるものである。

はつきりと言つて、私たちの心の中には、醜悪なもの歪曲されたもの、さらには邪悪とまで考えられるようなものが、かなりひそんでいる。「私は悪いことは少しもしていません」といつても、その人の心の中を遠慮容赦なく暴いてゆくと、人を不当に責めたり、恨んだり、そねんだり、あるいは自分自身を痛めつけたり、

粗末にしたり……というような事実が出てくる。

少なくとも私自身は、多分にそういうものを感じて、何とか、より一歩向上してゆこうとつとめていた。そうした面からいつても、名作とか名品とか、立派なものに接する時、そのもののもつ、よさや立派さがこちらの心を、よりよく、より立派にする機会を与えてくれているように感じられるのだ。

といつても、もちろん高価な食器を使い、絹のフトンに寝るべし、衣服は最高級品を着用せよ、などと主張しているのではない。

私たちにできるのは、工夫して暇をつくり博物館や美術館また展覧会場などにおもむいて、そうしたものの鑑賞をすることである。虚栄のためでも、逃避のゆえでもなく、自己自身の向上のためである。

「向上」といえば、固苦しく響くかもしれないが、人生はすべて向上を目指すのでなければ無意味であると、私は確信している。低下の道はたどりたくない。「死してなお向上」である。〔丸山竹秋選集〕より〕